

【入間市】

1人1台端末の利活用に係る計画

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

(1) 個別最適化された学習の実現

AIを搭載したデジタルドリル教材ソフトの導入により、各児童・生徒の学習進捗に応じた個別最適化された教材提供が可能となる。これにより、生徒一人ひとりが自分のペースで、それぞれの学力に応じた学習を進めることができ、知識・理解の定着や深まり、学習意欲の向上を目指す。

(2) 協働学習の促進

授業支援ソフトを活用することで、教室内外での児童・生徒同士の協働学習が促進される。リアルタイムでの意見交換や共同作業が可能となり、学びのインプットだけでなく、アウトプットを増加させる。

(3) 多様な教材と学びのスタイル

デジタルオンライン教材、動画、シミュレーションなど、新たな教科書には従来のものにはない多様な学びの資源があり、それらを効果的に利用する。これにより、視覚的、聴覚的に多様な刺激を受けながら学ぶことで、理解の幅を広げていく。

(4) 学習履歴の蓄積と活用

学習履歴が蓄積され、それを元にしたフィードバックが可能となる。これにより、教師は児童・生徒の理解度や苦手分野を把握しやすくなり、効果的な指導を目指す。

2. GIGA第1期の総括

本市は、国のGIGAスクール構想を踏まえ、令和3年度に、授業支援ソフトやドリル教材ソフトを利用可能とした1人1台端末(iPad)の整備を完了させた。

また、通信ネットワークとしては、LTE通信を採用し、場所を選ばずインターネットを扱うことができるようにした。その結果、校舎内に限らず、校庭・校外での利用を可能とし、体育科の授業や校外学習でも効果的に活用できる端末となった。整備当初は、端末を学校で管理していたが、その後、原則家庭への持ち帰りを推奨することで、家庭のWi-Fi環境に関係なく、ドリル教材ソフト等を利用し、いつでもどこでも個に応じた学習を行うことができるようになった。家庭環境によるICTツールの利用格差は本市ではないといえる。

さらに、臨時休校時やコロナ禍の登校できない状況における学びへの保障の取り組みとして、Web会議システムを活用したオンライン学習を取り入れることができた。その後、様々な理由で学校に登校できない児童・生徒、またその保護者の要望を受け、各学校が可能な範囲でオンライン学習の提供を継続しており、学びを止めないための重要なツールとなっている。

一方、教師のICTスキル向上は重要な課題であり、今後のテクノロジーの発展を予想すると永遠の課題ともいえる。市や市教育委員会は、定期的な研修やサポート体制の強化を図るよう努めた。

オンライン学習におけるセキュリティやプライバシーの問題、個人情報の管理にも引き続き注意していき、この1人1台端末が児童・生徒の新たな文房具として定着していけるよう今後も歩んでいく。

3. 1人1台端末の利活用方策

本市は、今後も端末の整備・更新により、児童・生徒向けの1人1台端末環境を引き続き維持していくことを前提とし、以下の方策を立てる。

(1) 個別最適な学び・協働的な学びの促進

児童・生徒一人ひとりの特性や学習進度に応じ、指導方法や教材、学習の機会などを柔軟に提供する。

AI搭載のドリル学習ソフトを効果的に活用し、時と場所を選ばず、児童・生徒の個に応じた学習を提供し、知識理解の定着だけでなく、学びに向かう意欲向上を目指していく。また、学習支援ソフトを活用した協働的な学びを通して、教員と児童・生徒、児童・生徒同士の双方向のやり取りを促進させ、深い学びの実現を促進する。

(2) 子どもたちへのフィードバックや評価の充実

教員は各種ソフトにおける児童・生徒の取り組みを迅速に確認することができ、そこから学習に対する具体的な支援策を示していく。また、児童・生徒の取り組みに対し声かけ（称賛）をすることは、児童・生徒の学びに向かう意欲を大きく高めるものになると捉えている。保護者との連携を図り児童・生徒へのフィードバックをより一層高めていく。

挙手や発言を苦手とする子どもたちにとって、1人1台端末が文房具として機能することで、表現の幅が大きく広がる。教員は、児童・生徒の多様な表現方法を認め、子どもたちの新たな発見や、思考の深まり・変容を見取ることができ、より一層確かな評価を行っていく。

(3) 他者との交流、社会貢献のより一層の実現

Web会議システムを活用したオンライン学習は、これまで同様に家庭と学校をつなぐだけでなく、学校と学校、さらには国際交流を可能とする。本機能をこれまで以上に活用し、異なる文化の人たちとコミュニケーションを図り、多様な考えやグローバルな視野を養っていけるよう努めていく。

また、地域と共に歩む学校を目指し、児童・生徒が地域に貢献できるような活動を推進していく。具体的には、子どもたちがデジタルツール（グラフィックデザインソフト、ビデオ編集ソフトなど）を活用し、ポスターやPR動画、ホームページを作成するといった創造的なプロジェクトを行い、地域の方々と交流を図り、喜んでもらえるような取り組みを実現する。